ある雪の旦(あした)に

「全て遠い昔のことさ」、長い吐息の最後に懐かしむように言うと、齢八十を超える忠徳はそっとまなこを閉じた。

翔真はその口元が緩むのを見逃さなかった。厳格な祖父の一番柔らかいところを見た気がした。

祖父母の馴れ初めを聞いてみようなんていうのはちょっとした興味からだった。大学も臨時休講やリモート講義が続き、これが憧れた学生生活だったかと思っているのは何も翔真だけではないだろう。恋人はおろか親友と呼べる友もできているのやらできていないのやら。そんな中、正月休みに会った祖父に自分はなんていう質問をしたものだろう。「お爺さんの奥さん、えっと、僕のお婆さんに当たる人って…」。敢えて「お婆さんに当たる人」なんてまどろっこしい表現をしなければならなかったのは、翔真がその祖母に会ったことがないからだ。祖母は翔真の母が十歳の時に他界していた。福岡の出身の祖父が栃木の母と知り合った理由はこれまで教えてもらったことがなかった。「お爺さんとお婆さんってどこで知り合ったんですか？」二十歳にもなる孫に初めて直球で質問された祖父忠徳は一瞬豆鉄砲を食らった鳩のようにぱちくりと瞬目し、それから深呼吸して遠くを見るように話し始めたのだ―。

今朝はたいそう冷えますわね―。

小さなダルマストーブを囲む待合室から外を見上げると宇都宮を出た時には青く澄み切っていた空はいつの間にやら白く雲に覆われ、霧のような粉雪が遠く霞む山際を水墨画のごとくぼかしていた。待合室から外を見遣るとたった今乗って来た三両の客車列車がモノトーンの中に沈んでいる。いつもなら五分かそこらの待ち合わせで来るはずのトロッコはこの日まだ姿を見せていなかった。

えぇ、お嬢さんはこんな列車でどちらまで？まさか山で働かれているわけではないですよね？

忠徳は不審に思った。薄緑色の羽織に深紅の髪留めが鮮やかな細面の娘が向かいのベンチに掛けているのを見るに、はてこの人はこの先の寂れた鉱山地帯に何の用があって行くのだろうと訝しんだ。三方を山に囲まれた百目鬼(どうめき)の駅には構内にヤードが広がり、狭軌とナローの線路が入り乱れて朝から貨車への積み荷の入れ替え作業が行われている。奥武線の貨物線に乗り入れる貨物列車に、船生駅への連絡線を介して東武鉄道矢板線と出入りする貨物列車もあるから賑やかだ。小さなタンク式の蒸気機関車が構内を行き来する度にポッという警笛がこだました。今日はその音もどこかマットで、はらはらと舞う粉雪の方に消えゆくようだ。

伯母が、玉生(たまにゅう)で商いを行っているんです。今日は一寸手伝いに…。

百目鬼駅は奥武鉄道宇都宮日光線徳次郎(とくじら)駅から分岐する貨物線の終点。徳次郎駅の時刻表には掲載がないが、この先の山で働く男たちのために、朝に下り二本、夕に上り二本だけ、貨物用の蒸機が貨車と混結で客車を引っ張る工員輸送列車が徳次郎～百目鬼間で運転される。そしてこの百目鬼から先へは点在する鉱山や植林地へ向けて敷設された専用線が延びているのだが、今現役で列車が運転されているらしいのは、東武矢板線船生駅と行き来する連絡線の外に、北方の東古屋(ひがしこや)地区を経て間もなくダム建設が始まるダムサイトに向かう路線、そして、東古屋で分岐してさらに北方の山中を分け入り天上沢鉱山を通って玉生鉱山に向かう路線だ。最近まで東古屋から西に折れて大滝方面を目指す林用軌道もあったがこちらは廃止されてしまった。どの路線も正規の旅客列車

はなく、あくまで沿線の林業、鉱業で働く者のために企業がトロッコによる専用列車を走らせているのみである。

へぇ、玉生鉱山まで行かれるんですか！僕も途中まで行きますよ。でも、鉱山の近くで商いって…？

えぇ、ちょっとした商店を。この時期はどうしても手が足りなくてと…。宇都宮の駅で奥武線の駅員さんに玉生へと伝えましたら徳次郎からの貨物列車に客車がついているからそれに乗って途中で乗り換えなさいと…。そうやってこの駅まで来てみたのですが、それにしてもここはまた大分鄙というかその…。

思えば忠徳も冬場の伐採シーズンの臨時工として雇われてきたのだった。勤めていた九州の炭鉱がガス爆発で事故を起こし廃坑となったのを契機に北海道の炭鉱へと職を替えようと汽車に乗って上京したところ、都内逗留中に埼玉の遠戚から栃木の求人を聞きつけてここに流れ着いたのであった。温暖な九州出の忠徳には北関東の吹きすさぶ空っ風は何とも受け入れがたいものがあったが、この日は風のない代わりにいつ止むとも知れぬ白き雪が音もなく天から降りて駅前の小さな小さな車寄せを仄明るくしていた。

突然、駅員室の中でけたたましくベルが鳴った。帽子も被らず、煤けた制服もいつから洗っていないのかという駅長が眉毛にかかるほどに伸びた白髪をかき上げながら立て付けの悪い引き戸をこじ開けて待合室に現れる。

十五分遅れ～、東古屋、天上沢、玉生鉱山線！

列車、というのも憚られるような小さな、申し訳程度の屋根だけがついた四両編成のトロッコ。どういうわけか今日に限って山に入る男の姿は他になく、忠徳と娘は特に申し合わせるでもなく機関車次位の客車に二人して向かい合ったのだった。煤で真っ黒になった作業着姿に刈り上げた髪の毛に銀色のものが混じる機関士は、駅長の笛を合図にホームを確認し、機関車の汽笛を吹鳴した。

ガタリ、ゴトリ…七六二 mm の薄っぺらい軌道を小さなコッペルが蒸気を上げて牽引する。軌道を包むようにそびえたつ木々は次第に落葉広葉樹から替わって植樹された杉の木が目立つようになり、その細く伸びた枝先に白く着雪する様はバレリーナの指先まで神経が通うがごとく、繊細な中にも強い意志を感じさせた。

あら、先程までここまで白くなかったのに！

この鉱山線は山の高いところまで登りますから、この先はきっともっと積もっていますよ。

凹みが目立つ機関車はどこかからの中古なのだろうか。トロッコは時々息を整えるように減速しながら、泉川に沿った渓谷を遡上していく。途切れ途切れになっていた畑も見えなくなりいよいよ山奥深くに差し掛かろうという頃、列車は交換設備のある小さな広場で停車した。

野州分岐、野州分岐！離合待ち！

機関士がしわがれた声で叫び、こちらをちらりと振り返る。四両のトロッコには作業着姿の忠徳と、和服姿の娘。一寸首をかしげて二人の様子を見ていたが、再び前を向き直すと釜に石炭をくべていた。

すっかり白一色になった山間の信号場からは捨てられたトロッコの跡が左に折れて延びている。かつては一つ山を

越えた土佐川沿いにある野州鉱山へもトロッコが延びていたらしく、野州分岐とはその名残の名前だそうだ。

えっと、玉生とは、どういうところですか？

いえ、私も伯母の家に行くのは初めてで…。でもこんな山の奥なんて知りませんでしたわ！今日は宇都宮から参りましたが、同じ栃木県にもこんなところがあるのですね。ほら見て、空のあんな高いところを、鳶が…。

あぁ本当だ…

見上げると、輝く空から舞う雪に抗うように、一羽の鳶が大きく弧を描いてトロッコを見下ろしていた。鳥はこんな冬場でも自分で食べ物を見つけなければいけないのだろうか。そう考えると、九州から流れて来た自身の身の苦労など吹き飛ぶようだった。

本当に、あぁやって食べ物を狙っているのだろうけれど、この雪では動物も皆、穴の中なんじゃないかね。冷たい、冷たいって。

忠徳がそう言うと、娘は目を細めてクスッと笑った。忠徳もおかしくなって、口を開けて笑った。ピーッと汽笛がこだまし、山を下って来た反対方向のトロッコが木々の陰に隠れる軌道から姿を現した。するとどこに隠れていたのだろう、小鳥たちが一斉に飛び立ち、杉の木から降り積もった雪がパラパラと落ちてちっぽけな停車場一面に降り注いだ。

まぁ、きれい！

雲間から儚げな太陽が覗き、木々から落ちた粉雪がキラキラと輝いた。壁もないトロッコ列車だが、二人で乗っていればどこまでも乗って行けそうだ。忠徳は昼食にと持って来た握り飯を一つ差し出すと、娘に握らせた。

玉生鉱山まではまだ遠いですから、朝ご飯にどうですか？

娘が顔を赤らめて礼を言うのをかき消すように、今度はこちらのコッペルが軽快な汽笛を鳴らした。ゴットン…トロッコ列車は重い腰を上げたようにゆっくりと滑り出し、道なき森の中、時に倒木が頭上に跨るその下を、掻い潜って進んでいく。

私、勅使河原玲子と云うんです。元々は佐野の出身なのですけれど、今は母は生家の宇都宮に帰っていて…。先程は伯母の手伝いに、などと申してしまいましたが、実のところ、父が逝ったんです。先の朝鮮半島の戦争で。それで伯母の元に養子にやられることになって。

それはお気の毒に…。お父様は朝鮮半島のご出身で？

いえ、掃海とか何とか、あっ…

ハッとした顔をして口を噤んだ玲子の面持ちに、忠徳は聞いてはいけないことを聞いたかもしれない、と後悔した。朝鮮戦争に陰で日本人が駆り出されているらしいという噂は九州の炭鉱で聞いたことがあったが、国家として参戦

していない以上それは公知の事実ではないはずであった。そして、父親が亡くなったがためにこんな山の奥の鉱山しかない場所に追いやられるとは、あまりにも哀れではないかと憤りを感じたのである。

いやいや、戦争は、もうこりごりです。人が殺し合って、良いなんてことはないんです。

気が付くとトロッコはますます揺れが大きくなり、右に左にとカーブを描く軌道を今にも脱線しそうになりながら走っていた。先頭を行くコッペルの動輪の、ガラガラという鈍重な音だけが白く染まる森に響いている。

東古屋、東古屋～。

キャブから汗を拭き拭き、機関士がこちらをちらっと見て東古屋への到着を伝えてきた。ここから東に分岐する路線はかつて釜ノ沢鉱山まで延びていたという。一度は廃止されていたが荒川にダムが造られることになって、その建設資材運搬鉄道として見直され、再び整備が進められているらしい。ひたすら森を抜けて来た軌道が開けた東古屋の駅に着くと辺りには数件の古びた民家が見られた。

伯母様は玉生鉱山の駅でお迎えになるのですか？

えぇ…玉生の駅まで来るようにと言われているんです。伯母の家は一体この先のどんな山の中なのでしょうね。キツツキや、もしかしたら熊もいるようなところでしょうか？

熊だって！？それは怖いな！

またしても二人で笑った。熊よけには鈴を持ち歩いた方が良いだろうかとか、死んだふりをすれば良いのだろうかとか、そんな話をするうちにトロッコ列車は再び山深くを走っていた。いつしか降り続いていた雪も止み、小さな沢を渡る鉄橋では木々に東からの陽が差して葉に積もった白銀の雪をまばゆく輝かせていた。カーブを行き、橋を渡り、またカーブを行くと目の前に真っ暗なトンネルが口を開けている。

この長いトンネルを越えたら、天上沢というところです。僕はそちらの植林地で働いているので、もうすぐさようならですね。玉生鉱山はこの列車の終点でしょうから、どうかお気をつけて。

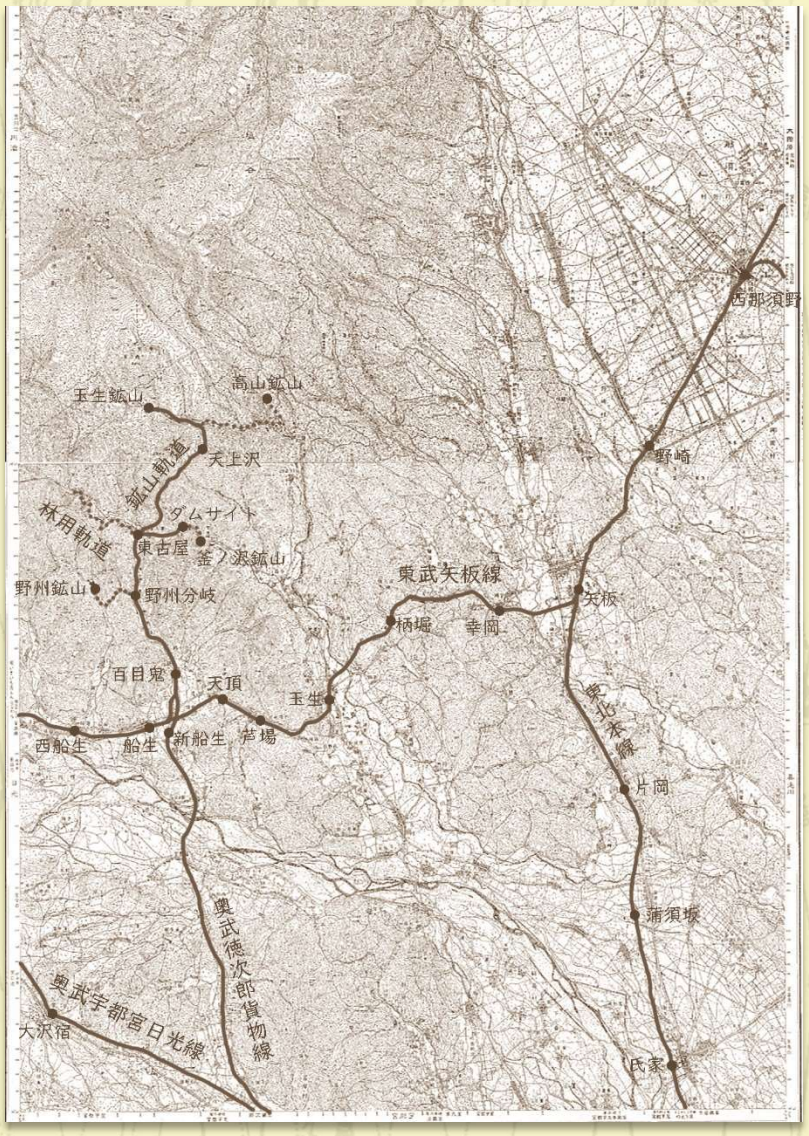
真っ暗なトンネル、一部はどうやら素掘りのようだ。水の滴って来る坑道のような暗がり。砂地の軌道にコッペルのキャブから赤い火が時折見える。トロッコにも一応小さなカンテラが一両に一つ備えられているが、足元も見えぬ頼りない光。そのカンテラに映える玲子の白い肌がかすかに震えているように見えた。がそれも束の間、機関車の煙が前から漂い視界を遮る。

あ、玲子さん！？あ、そうだ、自己紹介をしていなかった…

続きを言おうとした忠徳であったが全て機関車のドラフト音に掻き消された。黒々とした煙、チラチラと消えては現れを繰り返すカンテラの灯…。隧道全体が地鳴りのように響く中、コッペルは最大限の力を振り絞って峠のトンネルを登っていた。ガタゴトガタゴト…。どれくらい経っただろう、忠徳にとっては長い、長い時間であった。しばらくすると機関車は急に静かになり、列車は絶気で下り坂を走っているのが分かった。そして闇の中に再び玲子が姿を現した。

あら、随分とお顔に煤が…あら私も！これ、一張羅なのに。

それは大変！と同情の面持ちを浮かべた忠徳だったが、すぐに笑い出した玲子を見てほっとした。と、列車の行く先にぽっかりと光が見え、トロッコは山奥にひっそりと佇む天上沢の駅に到着。忠徳は腰丈までしかない客車の扉を開け、地上と大して高さの変わらない古びたホームに片足を降ろした。晴れ上がった青空が、真っ白な木々が重なって作る小さなフレームに切り取られて列車を見下ろしている。



昭和 27(1952)年　栃木県北部鉄道地図(国土地理院古地図より編集)

玲子さん、有難うございました。あ、僕は工藤忠徳という者で…

と言うや否や前から「おーい」と声がする。作業服の機関士だ。

お客さん、どこまで行くんで？今日はこのトロッコは天上沢で止まりですよ。

えっ、と玲子が思わず声を挙げた。

天上沢の伐採所も今日はよっぱら雪降っとったから休みらしいし、あんたら二人ここからどうするんで？

何ですって？

忠徳も声を挙げた。

何だ、あんた伐採所の工員さんかい。そりゃその制服だもんな。今日は休みって、連絡来とらんかったんかい？あぁそうか、あんた寮に入っとらんのだろう。寮には昨晩にウナ電打ったって、事務所のおっさんが言っとったに。それで、お嬢さんはどこに行きたかったん？

あの、私は玉生の伯母の家に…。

あ、お嬢さん、このトロッコはこの先玉生鉱山に繋がっとるけれど、お嬢さんの玉生って、玉生村…ほら、東武矢板線の玉生駅の方でなくって？玉生鉱山と玉生村は別もんで。あぁあそんなことなら百目鬼の駅で聞いてくれたら良かったんにな。汽車のうら乗っとるから、そんな煤だらけになりよって。えんがみた、えんがみた！

どうやら二人してやってしまったようだ。忠徳は職場からの電報を受け取れずに休みと知らずに出かけ、玲子は行先を間違ってしまったらしい。どおりでこんな山奥のトロッコに着飾った娘が一人で乗っているはずがない。この積雪では夕方の返しの列車まで身動きも取れないからと詰め所に入れてくれた機関士さんがいなかったら二人してこの山奥の駅で凍えるしかなかっただろう。

僕たち、なんだか同類のようですね。

えぇ、本当に。機関士さんが玉生の伯母に電報を打って下さって助かったわ。でもねその文面が「タマニフコウザントアヤマツタヨルノキシヤデムカウ」って…なんてドジな娘だと思われちゃいますね。

あばら家のような駅の詰め所での半日。気が付けば昼を過ぎ、再び空は白く霞んで舞い降りる雪に鉱山軌道のナローゲージもふんわり埋められた。忠徳は決めた。このお嬢さんを伯母さまのお宅まで届けて行こうと。夕方、刻一刻と暗くなる森の軌道を、逆機のコッペルに牽かれて下りていく。機関士さんに近すぎても気を遣うので、というわけではないが 2 人とも申し合わせたように最後尾の車両に向かった時にはお互い見つめ合ったものである。

良いんですか？もしトロッコの連結が切れたら真っ先に置いて行かれるのはこの車両ですよ？

嫌だ、もう、怖い！

嫌だ、と言いながら玲子は笑った。百目鬼で奥武線の貨客混合列車に乗り換えて新船生の仮乗降場で降ろしてもらい、東武線の船生からこれまた貨客混合の汽車に乗って玉生に着いた時にはかつて芭蕉も投宿したという宿場の村は静まり返り、雪明りにそっと浮かび上がる駅頭の小径の先に、割烹着に番傘を持って微笑む玲子の伯母の姿があった。

玲子さん、草深き所までよくお越しくださいました。お隣の方はお連れ下さったのかしら？有難うございます、今度お礼をさせて下さいね。

当初予定していた北海道行きもなくなり栃木に居ついた忠徳が、再び玲子と会うのは三月後のことであった。

え、SNS はもちろん電話もないのにどうやって連絡を取っていたんですか？？

翔真は驚き眼で聞いた。

あはは、あの頃の百目鬼駅の時刻表は朝二本、夕二本だったから。いつの頃からか毎朝玲子さんがお弁当を持ってタンク車の行き交う朝の貨物駅に来てくれるようになっていたんだよ。

そう言って座椅子にかけた祖父の瞼の裏には、すでに人が入ることもなくなった山奥の軌道と、そこで妻となる人と愛を育んだ日々が見えていたのだろうか。全てはあの雪の旦から始まったのだ。今でも脳裡に浮かぶ煤の香と砂地の頼りない軌道に伝わる振動、そしてタンク車がせわしなく行き交う百目鬼の駅に毎日会いに来てくれた玲子の涼し気な目を思い出すと、忠徳は満たされた思いで再びまなこを開け、翔真に微笑むと、また次の瞬間には心地良い

寝息を立てていたのであった。